
第 24 章 息子アブベクルのこと (後編) : 1974 年～1975 年 (37 歳～38 歳)

大叔父の昔話

息子のアブベクルを入院させた後、私は、アルジェリアへ帰る前に、パリにいる母方の大叔父モハメッド・ベン・カドゥールに会いに行くことに決めた。この大叔父は、1911 年頃、私の父がまだごく小さかった時にアウレフを出て行った。私は、以前に 2 回フランスを訪れていたが、いずれの機会にも大叔父には会えなかった。1952 年に初めてフランスへ行った時は、私はまだ 15 歳の子供で、滞在地のオセールから 160 キロも離れたパリへ出かけていくのは無理だった。また、2 度目に農業局の研修でフランスへ行った時も、途中で抜け出すことができなかった。従って、今回はなんとしても大叔父に会いに行かなければと思ったのだ。それに休暇も 3 週間ほど残っていた。

大叔父はアウレフを出る時、ラクダを持っているシディ・ムーレイ・ゼダン (Sidi Moulay Zaidane) という男と一緒に旅立ち、インサラーを経てフォガレト・エズーアまで一緒に行った。別れる時シディ・ムーレイは大叔父に、一つお守りをくれた。それは、ジェラー (Derrâa) と呼ばれる紺の藍染のトゥアレグ族の衣装だった。大叔父は、それが何かトゥアレグ族の神秘の力を秘めていると感じて、終生大事にとっておき、何か身に危険が降りかかりそうな時に身に付けた。それが、たとえパリの町中であってもである。大叔父は 60 年もの間一度もアウレフに戻らず、1973 年になってやっと (訳注: この章の話は 1976 年頃のこと) 初めて里帰りして来たが、その時も、このトゥアレグの衣装を携えていた。

大叔父は、フォガレト・エズーアで連れと別れた後、エルゴレアまで行った。どういう交通手段を取ったかについて、彼からは何も聞いていないが、多分徒歩より他になかっただろうと思う。彼は、さらにエルゴレアから、義理の弟、つまり私の祖父のハマジがいるガルダイアまで行った。当時ガルダイアはムザブと呼ばれていた。大叔父は祖父に合流すると、しばらく二人でガルダイアの住民の家を回って日雇い仕事をした。しかし、間もなくハマジは重い病になり、回復することなくこの世を去った。私はずっと、祖父が何の病気でなくなったのか知りたいと思っていたのだが、大叔父は、祖父は咳き込み、血を吐いていたと言っていたので、おそらく結核だったのだろう。私は、祖父に聞いてみたかったことが一つあるのだが、それはもう永久にかなわない。何故奴隷の身分から解放された後、まだ若かったにも拘わらず、故郷に戻ろうとしなかったのかと。実際、タレブ・ムバラク・ハダラーという人が当時のこととして証言しているが、反乱を起こすことで自由を取り戻した奴隷たちも数多くいたそうだ。彼ら奴隷は、身分制度が確立したアウレフに留まっていたのでは永遠に自由に

なれないと考え、唯一の方法として、主人に対して反乱を起こしサハラ南部へ逃走した。もちろん主人側も放ってはおかなかった。奴隷が逃走する度に、主人たちも武器を持って追いかけて、追いつくと両者の間で激しく戦いになり、時には死人も出たという。こうした衝突が、どのくらい犠牲が出すものなのか正確なところは分からないが、主人側の目的は、あくまで奴隷たちを生きて連れ戻すことにあった。奴隷は財産であり、また、他の奴隷たちに、逃走しても無駄だと見せしめにする必要もあったからである。

大叔父は、祖父の埋葬を済ませた後、ガルダイアに留まっているのが辛くなり、さらに北のステール (Sougguer) を目指すことにした。その後、何時どうやってか詳しいことは分からないが、とにかく大叔父は、第一次大戦の最中にフランスへ渡り、パリに腰を落ち着けた。当時のパリの街灯はまだ電気になっておらず、夜になると市の雇人が一つ一つガス灯に火を入れていた。しかし、地下鉄は既に電気で走っていた。大叔父は、ルノーやシトロエンの工場を当たったが、そこでは仕事が見つからず、結局、石炭からガスを造る工場で働き始めた。数年後、工場で人員削減が行われたのを潮に、彼は仕事を止めた。ガス工場の仕事は過酷で、ものすごい暑さと粉塵の中、スコップで機械に石炭をくべる作業をさせられたそう。それに、工場の前の道は、アスファルトどころか石畳にさえなっていなかったもので、朝夕二回何千人もの労働者が出入りする時には、彼らの足が立てるすごい砂埃を嫌でも吸い込む羽目になったという。以上は、大叔父が 1973 年に帰郷した時に聞いた話である。

さて、話は 1976 年 2 月のところへ戻り、私はモンリュソンから列車でパリを目指した。しかし、この選択は誤りだった。列車はものすごく込んでおり、私は終始立ったままでパリまで行った。パリに着いてみると、大叔父は入院しており、ずっと眠ったままの状態が続いていた。当初私はパリには長くいるつもりがなかったが、やむを得ずホテルに腰を落ち着けた。私がパリに着いてから 3 日目によく、大叔父は意識を取り戻した。彼はアウレフのことや一族のことを色々と私に尋ねた。

アブベクルを連れて家へ還る

息子を無事入院させ、大叔父を見舞うことも出来たので、私はほっとして、少しアルジェリアへ帰る前に息抜きがしたくなった。そこで、前々から行きたいと思っていたスイスのバーゼルにいるジェルメンヌ・ヴィンテルベルグさんの所を訪ねることにした。バーゼルの博物館には、彼女が手掛けたアウレフの歴史や民俗の展示があるのだ。その後は、往きにも世話になったアルベールヴィルのトンプリエ一家の所を再訪した。しばし、一切の悩みや心配から解放された天国のような日々だった。休暇が終わって帰路につく時は、私は後ろ髪

をひかれる思いだった。私は列車に乗り、何カ所か経由してマルセイユまで行き、次いで空路アルジェへ飛んだ。アルジェからは更に南部行きの国内線に乗り継ぎ、インサラまで行き、後は 180 キロの沙漠道路を走ってアウレフへ戻る予定だった。アルジェの空港で、私は、今となつては名前を思い出すことが出来ないのだが、一人のある知人と出会った。彼は私に一つの悲しいニュースを告げた。私には雷に打たれたような衝撃だった。叔母のオジェクス・アシェーヌ (Augeix Achène) の夫と、彼女の友達の一部が事故で命を落としたというのだ。いったい何が彼らの身に起きたのかと、私は聞こうとしたが、まるでマラソンを走り終えたランナーのように心臓がバクバクいって、上手く言葉が出てこなかった。この知人の説明によると、犠牲になった二人は、ガルダイアの私の従兄弟ハウ・サダム (Haou Sâadoun) を訪ねた時に、トラックにはねられたというのだ。私は打ち沈んだ気持ちでアウレフまで帰った。アウレフに着いてからも、しばらくは心が二つに割れてしまったみたいだった。アウレフの病院のハンス医師に、バーゼルのカーニバルで録音した音楽や、写した写真のスライドを披露しに行かなければならないと思ったが、気持ちを整理するのに長い時間がかかった。

私は校長の仕事に戻った。生徒の人数はだいぶ増え、750 人に達していた。教育委員会は、私の負担を軽減するため、完全に授業の受け持ちを免除し、更に助手も一人付けてくれた。以前は 4 時間授業を受け持ち、2 時間校長の仕事に当てるという具合だった。また、息子が遠隔地に入院している事情も考慮され、6 カ月に一回面会に行くため休暇をとることも認められた。ただし、旅費は自分の負担だった。全く慌ただしいかぎりだったが、いいこともあった。フランスへ行けば、現地の友人たちと再会できたからである。

そうした友人の中に、シュミット一家の人々がいた。シュミットさんは、アルジェリア・フランス間の協力協定により、1970 年代初めムザイア (Mouzaïa) (訳注:アルジェ南西のブリーダ県) の病院に赴任して来た医師である。シュミット一家は、アルジェリア在任中に二度アウレフへ遊びに来て、二度とも私の家へ泊まり、以来家族同士で親しく交流を続けていた。シュミット医師は、この話の当時はストラスブールの病院に勤務していたが、現在はロレアンに住んでいる (訳注:フランスのブルターニュ地方)。シュミットさんには妹がいて、南仏のエクサンプロバンスの病院の精神科で医師として働いていた。この妹さんが、私の息子アブベクルのことを知り、手助けを買って出てくれた。彼女がツールの自分の両親に会い帰る時は、毎回、アブベクルに会いにモンリュソンの病院に行ってくれるというのである。彼女は息子を訪問する度、私たちアルジェリアの家族に様子を知らせてくれ、時には息子の写真も送ってくれた。彼女は本当に心の優しい人道的な人物だった。

私の何回目かの渡仏の時、彼女もちょうどツールの御両親の家に帰っているというので、私は彼女に会いに行くことにした。なんとしても会って、彼女の厚意にお礼を言いたかったのだ。私はそれまで、精神科医のシュミットさんとは電話でしか話したことがなかった。ツールの御両親の家では、私を温かく迎えてくれた。ストラスブールにいる兄の方のシュミット医師が、私のことを話しておいてくれたらしい。シュミット家は、大人数の一族で、ツールの町の旧家らしかった。ツールの方の家のお父さんは、当時ツール大学の学部長をしていた。到着の翌日、私は、一家の広大な所有地を案内してもらったが、そこには大きな農園が広がり、川まで流れていた。このような風景は、私のように沙漠から来たものの目には、毎回新鮮な驚きである。私は、この時一家のもう一人の息子とも知り合いになった。彼は神父で、当時はマリで活動していた。ツールの町の来歴や、町の名家シュミット家の歴史について、私に色々説明してくれたのは、この人物である。この時見分した中で特に印象的だったのは、ツールの城の古いオレンジの木のことである。城の前に行くと、箱に入った古いオレンジの木を数本見ることが出来る。これらの木は、もう実を付けることはないが、まだ生きていて、夏は太陽の当たるところに出し、冬は屋内に入れておくという話だった。はっきりと数字は覚えていないが、確か、これらのオレンジの木の樹齢は 100 年と少しと聞いたと記憶している。

この時、私はもちろん、精神科医のシュミットさんと、息子のアブベクールの病状についても時間をかけて話し合った。彼女は何回も息子と面会を重ね、その症状を慎重に検討した結果、次のような結論に達したとのことだった。アブベクールは、彼の運命をあるがままに受け入れるしかない、と。そして、アブベクールは家族のところへ戻り、家で家族に世話をしてもらって暮らすのが、彼にとって最良の選択だと言った。息子の状態が快方に向かう希望はほぼなく、逆に、おそらくは年齢と共に身体能力が悪化していくだろうとのことだった。私も、この考えに同意した。しかし、この時は一旦アウレフへ一人で戻り、1975-76 年度が終わり、学校が夏休みに入ったら、改めて息子を迎えに行くことにした。

その年の夏休みが始まると同時に、私はフランスへ行き、まずコロン (Colon) 一家の所へ寄った。コロン一家は、夫婦と娘二人の四大家族で、何回もアウレフに来たことがあったので、家族ぐるみで親しく付き合っていた。一家の父、レイモンの仕事は、金具工芸師で、フランスでは中々有名だとの話だった。一家は、フランスでは緑の農地の真ん中に美しい館を構え、そこで優雅な生活を送っていた。ここで撮った何枚もの写真を、私は大事にとってある。彼らと話していて、話題が息子のアブベクールのことになった時、レイモンが唐突に私に言った。

「帰る前に、鍼灸師の治療を受けてみたらどうだい？たとえ効かなかったとしても、害になることもない。」

私達がアルジェリアに立つ前に、レイモンは、彼の友人の鍼灸師に予約を取ってくれた。出かけていくと、その鍼灸師は、息子の体に 10 本の針を打った。4 本を頭に、2 本は胸に、残りの 4 本は体の別の部分にという具合だった。治療の相手は子供なので、私たち大人は三人がかりで彼が動かないよう押さえつけなければならなかった。痛みは直ぐに治まったらしく、子供も静かになったので、私たちは彼から手を離した。ところが、アブベクールはさっと頭に手を持って行き、針を 2 本抜いてしまった。この後、私と息子はパリの大叔父の所へ行った。当時大叔父は 87 歳と高齢で、独りで旅行が困難であったので、私がいるこの機会に故郷にもどろうとしたのだった。私たち三人はアルジェ、ガルダイア、インサラールを経由してアウレフまで戻った。